

なきごえ

“キーウイ特集号” (2)



1971

7

大阪市
天王寺動物園協会

◇ニュージーランドからの便り……。

キーウイ 2 種の紹介 (ブルース山野鳥保護園に於て飼育中のもの)

資料提供 (ニュージーランド、内務省) 野生動物保護局

◎北島キーウイ (Apteryx australis mantelli)



北島茶色キーウイ (ブルース山野鳥保護園)

◎コマダラキーウイ (Apteryx oweni)



コマダラ灰色キーウイ (ブルース山野鳥保護園)

キーウイの歴史

小林 桂助

キーウイの標本として最初に欧州にもたらされたのは Apteryx australis australis (南島キーウイ) である。1813年 Captain Barclay によって贈られたものであり、この標本は Lerly 卿の博物館に保存され、Dr. Shaw によって A. australis と命名された。

然し、この様な鳥らしからぬ不思議な鳥が果して実在するものかと長い間疑問とされていた。

1850年に動物学会の例会に mantell が北島で採集した第2の標本がもたらされ、新種として Apteryx mantelli と命名された。今日では後者は亜種として取扱われ、Apteryx australis mantelli (北島キーウイ) とされている。

生きた鳥は1851年にロンドンの動物学会で飼育したのが初めてであり、数年間生きながらえ産卵もしたといわれている。

Apteryx oweni (コマダラキーウイ) は1847年 Strange が採集した標本により Gould が初めて記載した。この頃は南島の西側には普通であり、欧州の博物館だけに沢山の標本が採集されたといわれている。欧州人が入り込むに及び、森林は伐採され、キーウイは食用として乱獲され、又犬や猫の被害も多く減少し、今日では南島の南部に少数のものが残っているだけである。

◇アメリカからの便り……。

キーウイについて

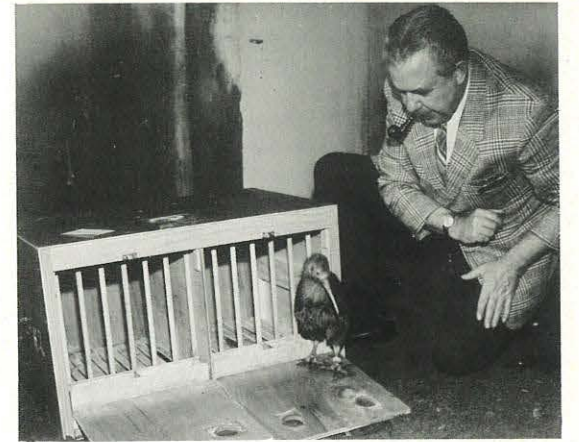
アメリカ カリフォルニア サンディエゴ動物園 ケントン・C・リント

50~100年前、初期の入植者がニュージーランドに到来した時、彼等は、未来の農場地が、うっそうとした密林の巨大な塊であることに直面した。この森林は(あるいは、オーストラリア、ニュージーランドではブッシュと呼ばれる)実際に密集したものであり、巨大な樹木が大抵、何百フィート近く空中にそびえほとんど太陽の光を通させなかった。一方小さい樹木、灌木は、入ってくるいかなる光をも利用しようとして争い、斧等の装備を持たない旅行者にとって殆んど通行不可能な壁を形成していた。木と灌木の生存競争によって多くの犠牲者が出ている。森林の地表面は目もくらむような枯木、老木のジャングルになり、その丸太からは絡み合った蕨の類が伸び出ている。尚、森林地全体は非常に様々な大小の洋歯類で、敷きつめられている。ニュージーランドの灌木林は同地で初期の軍事演習を行なった多くのG I(駐留米兵)達にも記憶されていることを聞いても、驚く人は少ない。このような国に最初に足を踏み入れた人の初めての仕事は壕を掘ることであった。数本の大本が伐採されジャッキとパールで端を掘り、その壕まで運ばれた。巨大なごぎりが持出され、一人が丸木の上に乗る、もう一人が壕の下に待機して、この原始林の中から建物に必要な厚板を、徐々に、苦勞しながら切り出して行ったこのような初期の出来事を、今日覚えている人はニュージーランドに現在多数住んでいる。彼等の記述によれば、当時徹夜して仕事をし、森林の四周からやって来るキーウイやウエーカ(くいな類)の啼声を良く耳にしたことである。今日初期の入植者達が現在ならば耐える人の少ない条件下で悪戦苦闘したその同じ場所に、世界でも有数の豊かな農場がありその農場では年中草が生い茂り、快活な町並が、所々に点在しているのが見られる。今日、このような地方ではそれが最初になって庭園愛好家によって植えられたものでない限り土産の樹木を見ることなしに、旅行することさえも可能である。このように原始林が伐採されると併行してこの地に住み慣れて来た原住の鳥の数も、減少して行くのが見受けられる。この傾向は多数の食肉動物、例えばテン、イタチ、ヨーロッパイタチねずみ等の移入によって一層強まった。白人が来るまで、原産の哺乳動物は、コウモリ若干の

なきごえ7月号もくじ

| | |
|--------------------|-------|
| ニュージーランドからの便り…………… | 2 |
| アメリカからの便り…………… | 2・3・4 |
| キーウイを飼って(2)…………… | 5 |
| 動物園グラフ…………… | 6 |
| 動物園ニュース…………… | 7 |

ザラシ類以外棲息していなかった。この結果、土地産のいく種かの鳥も減少しほとんど消滅寸前である。ニュージーランド人の中にはキーウイがこの種の鳥の一つであると信じている者も多数ある。しかし、現実とはかなり違ったものである。従来、ニュージーランドでキーウイの数の調査を試みた実績はないが、キーウイは、多数おり、また健全な状況にあると言えよう。それでは、なぜ、この国鳥を見たニュージーランド人が、これほど少ないのか? この答えはキーウイの習性と棲息地を知れば簡単である。キーウイは大きな鳥ではない。成鳥の平均体重は5ポンド(2.25kg)である。羽の色は鈍い不明瞭な色である。全く飛ぶことが出来ないの通常、密生した灌木林の下に隠棲しており、太陽光線を避けている。夕方になって、そこから外に出、夜明け前に眠りにつく。従ってキーウイが明るい日光にあてられると、一番近くの陰の所へかかれようとして、途中色々な物にぶつかりながら、ぼたぼたとした足どりで走りこむ。キーウイは一旦、隠れようと決心したならばほんの少しの草の下にでも入り込むことができるので、ほとんど見付けられなくなる(オークランド動物園では一週間ごとに体重測定調査実施の際キーウイを見つけるために、この点に詳しい数人の専門飼育者を付属牧場につれて来る事がある)ニュージーランド人でこの鳥を見た人が少ないということはおどろくに足りないことである。例えば、キーウイを捜しに行こうとする場合、一番良い方法は何であるか。地方の住民に最もキーウイのよくいる所はどこかを尋ねることが必要である。そして、手に明るい松明を持って、キーウイ独特の摂食時に鼻を鳴らす音、あるいは、やかましい音を立てて逃げて行く鳥の足音に耳をすましながら出来るだけ静かに歩いて行く。キーウイの逃げの音を初めて聞いた人は、いずれもカモシカぐらいの大きさの動物がいると思ったのも無理はない。なぜならキーウイが、向こう見ずに下生えや灌木の間を無理矢理逃げて行く場合、非常に大きな音を立てるからである。もし、幸運にも、じゃまされないで、餌を取っているキーウイに出合ったならばそのキーウイは、普通ならばあなたの存在に30秒間もそしらぬふりをした後何か異様なものに気づき、慎重さが先に立つ為か、威厳をもって引込み、その後たばたとした足どりで急に走り出す。このような行動を見ていると女王の役を演じている女優が舞台を退いた後、無台裏にお茶を飲みながら走りこむのが思い出されるのである。エサを食べている時のキーウイは何に似ているか?



(ニュージーランドから贈られたキーウイと筆者)

それは丁度、ステッキを持った老人に似ているというのは、キーウイはかがみ込むような足構えで、その長い口で、餌を求めて、注意深く地面を探りながら前進するからである。鳥が急にすばやく頭を振る動作をしたならば、食物を探り当てた印である。キーウイは実に熟練した手品師である。彼はうごめく虫を、口ばし的一端ではさんで、頭を一回動かすことによって根元の小さな舌先まで放り込む。成鳥のキーウイは一夜に4~500匹からの甲虫の幼虫を食べる。このような場合、彼等は一晩中、食べ続けねばならない。土地が堅い場合、たとえ若干の木の根や、くもなどのいそうな丸木の中の割目を探すくらいで、あまり時間をかけていない。キーウイは個々に非常に様々な味覚を持っているのである。あるキーウイは多量の虫を求めて、長歩きするのに対して、これらには見向きもせず、くも、甲虫、ヤスデ、ムカデ、蛾等を好むものもある。この鳥は地表又は地中を這い回る虫などに対して味覚を発達させている鳥のようである。独特の鳥で、鼻孔が、口嘴の先端について、鼻の中に土が入らないようにつばが付いている。キーウイが餌を食べる時に立てる大きな鼻音についても、すでに述べたが、これはキーウイが食物を求めて嗅いをかいていてと考えられるが、実験によれば、これは非常に急激に息を吹き出して鼻穴のゴミを取除き、また獲物の中から食物とそうでないものとを、分けるためであることが分った。キーウイは又、獲物のよくとれる所はどこか又、あまりとれそうでないところはどこか見分けることが出来るようである。キーウイが豊かな地域に来ると一平方メートルの地面を漁るのに半時間もかけている場合もある。飼われている鳥は非常に変わった食物、例えば、ビスケットやむしリング等を食べよう馴らされているので、嗅覚だけが主要な役割を演じている訳ではない。自然状態にいる場合でも、キーウイは数種のその土地の果物を好んで食べている。概して、キーウイは、地面で動いているものならば何によらずつばみ、食べられるか否かその後になって見分ける。嘴は穴をほるのに最も適切に作られている。キーウイの下嘴は上嘴より大きいこれは何インチが地中で、嘴を開けるのに役立つと思われる。このようにはっきりとした夜行性の鳥の場合、夜行動物に独特の大きな目をした鳥を想像する

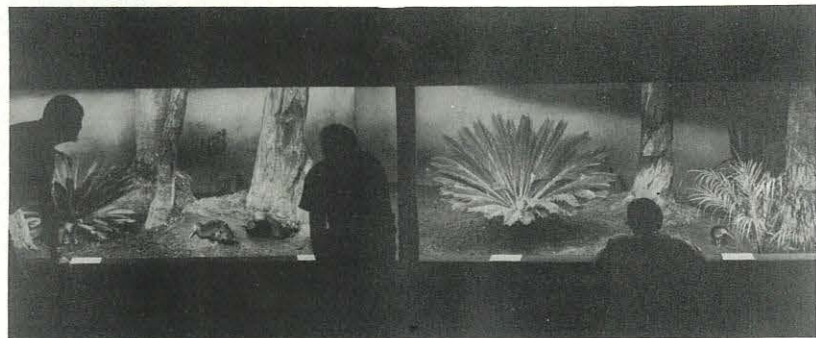
表紙の写真説明

“キーウイ”

もう入園して1年になりました。

好物のミミズ集めに苦勞したのも昔話、今ではミミズの畑をつくって自給自足、パンやドジョウも食べるので一安心。

が、実際は、同形の一般昼行性の鳥よりも小さい目をしている。もし、キーウイーが我々を近寄らせてくれるならば、その羽毛はエミューのようなとりみだれた外観をしていることに気付くであろう。この原因は、飛行性の鳥の羽のように効果的に羽と羽を結びつける働きをする「フラスナー機構」を持たないからである。飛行できない鳥あるいは走禽類はすべてこのような貧弱な外観をしている。次回、もし、サンデイエゴ動物園に来られる機会があれば一度、ダチョウ、アメリカダチョウ、ヒクイドリ、あるいはエミューをご覧になっていただきたい。いずれも、これと同じような外観を持っていることに気付かれるであろう。我々が鳥に近寄ると、鳥は逃げるよりはむしろ攻撃的に出てくる。そして、鳥はまっすぐ後立ちになるので、我々は普段ががんでいる時は24〜27センチの背丈しかないこの鳥が全身を伸ばすと45センチにもなるのには驚かされる。まず鳥は2〜3回おそろしそうな音をたててつづいてくるがこれは、実際にはみてかけただけである。というのは口ばしは先端が丸くなっていて内側の表面は全く平らであるので、苦勞してつづいたりかんざりする割には何ら効果が及ばない。強健なカモメには全く似てもつかない。キーウイーは真剣になれば、足で蹴ってくる。キーウイーの蹴る力は馬のように後方ではなく、だち



(木は植木鉢に入れ、照明は48ワットの青い蛍光灯。ミミズは、最初に30キロを舎内に入れてある。)

うのように足を先ず前方へ持上げてから、強力なハンマーのように下向きに突き刺すのである。キーウイーはあまり体重がないので、丁度闘鶏のけずめと同じものが足の内側についており、それを利用して、するどいひっかきを敵に与える。追いこめられたキーウイーは死物狂いになれば手強く、ほとんどねこや、ねずみの犠牲になることはない。しかし報告によれば猪に追われて殺された例はある。逃げる時は走るだけで段々速力を増してくる。飛ぶことは論外であるというのは翼は3〜6センチの長さしかなく、ほんの少しは羽毛しかついているからである。このような翼はバランスを取るのにも役立っていない。又鳥が走る時の姿は袋をはいて走る子供のように不安定なものである。これを見ていると飛ぶことは前足をバランス取りのために伸ばし二本足で立つ爬虫類から起ったという学説が頭に浮ぶ。翼が退化して、バランスを取ることが困難になるとどのようになるかをキーウイーによって知ることが出来る。あわてて走っているキーウイーがつまづいて転んだ後立ち上るまでに何度もころげることがよくある。この記事の初めにキーウイーのよく住む場所について、少し述べておいたが、これを捜すのは容易である。というのはキーウイーは非常に目立ちやすい啼声をしている。一度に10〜15回口笛のような声を徐々に音階を上げ、ピッチを早めながら発する。雄の

啼声は雌の声よりかん高いがいずれも、何マイルも遠くまで伝わる。啼声は繁殖期間中最も活発でかなり長期間に及ぶことがある。卵は6月早くから10月までに産卵される。一回に1〜2コでその代り1コの重さは390g〜448gである。孵化期間は約74日で雄が全面的に卵を抱く。かえったひなは、成鳥をそっくり小さくした様で、各器官も完成しているし、かえった時点から一人立ち出来る。我々はいままで、キーウイーが一種類であるとして話を進めて来たが、実際には、多くの種類がある。ニュージーランドでは、海峡が広くないにもかかわらず南北両島で異種のキーウイーを見つかることも珍らしくない。北島では一種類(*Apteryx australis mantelli*)しかいない。この種は黒と赤茶色の羽毛を有する。サンデイエゴにいるのはこの一種である。南島ではこれより幾分大ぶりで羽毛が灰色がかっている種類のものがある(*Apteryx australis australis*)が南島の南に少し離れてあるスチュアート島では、別の亜種(*Apteryx australis lauryi*)がいる。南島の背骨部分をアメリカの

ロッキー山脈あるいはシエラ山脈に比肩される一連の山脈が走っている。これらは南アルプスと呼ばれるがその緩やかな傾斜地は低地灌木の特徴である下生えの粗なセイヨウブナの森林で覆われている。この島の名は交互に点在するグリーンム色と灰色の

四角形の羽毛の模様由来している。この小形のまだらキーウイーは、*Apteryx oweni* と呼ばれ、山脈の西側に住む大形のまだらキーウイーである *Apteryx haasti* も主としてこの西海岸に多棲するがアルプスを横断する山道の東斜面の地域においても見かけることができる。マオリ族は他のポリネシア族と同様に自然色の羽毛のパターンを生かした羽マントを織っていたが珍重された。しかし、ここ何十年來、ニュージーランドの自然保護法が強力に実施されているので、キーウイーに危害を加えたり、彼らの生活の妨害をしたり当局の許可のない捕獲と羽毛の所持を許していない。従ってキーウイーマントを作ることは今は昔の物語りとなった。

(筆者・サンデイエゴ動物園鳥類部長)

キーウイーを飼って(2)

キーウイーとおつきあいを始めてもうすぐ一年になろうとしています。この特異な鳥について語るにはまだまだ資格が足りないとは思いますが、つきあえばつきあう程深みの出てくる鳥で、その良さの万分の一でもお伝え出来ればとあえてペンをとりました。

キーウイーが夜行性でミ、ズを主食にしている事はよく知られていますが、大体暗くなってから、巢の外へ嘴を出してその辺の地面に軽くふれ、極めて用心深く調べてから出て来ます。一歩一歩、やはり嘴でその辺りを調べ、ミ、ズを見つけると、時には嘴の根もとまで土中にさしこんで採食し、勢よくパチパチと云う音をたてたりします。もしその時、キーウイーがよく知っている匂いの人があるとフンフン云いながら傍に来てチェックします。「コンバンワ、ゴキゲンイカガデスカ」嘴で軽く方々にふれながらキーウイーはこう云っているように思えます。キーウイーが夜行性でなかったら、これはどの鳥にもない特色としてどんなに人気者になる事でしょう。しかし、多くの場合、敏感な嗅覚を持つキーウイーは知らない人が室内にいたり巣から出る事もなく、又出て来ても1m程の処で突然とび上って巣に走りこみます。そうするとヘンに意地っぱりになってすっかり日常のリズムが狂ったりします。ガラス越しならそんなに用心する事はありません。しかし昼間、活動を見ていたがけるように室内は日光をさえぎり夜のムードになっているのですが、出てくる事は極めてまれで、雨の日などの人のいない時に限られていくようです。やはり昼と人間に対しては危険を感じているのでしょう。暗い夜の間、一晩中巣から出たり入ったり時には30分から1時間休けいしたりして過します。遊ぶ事も案外好きなようで、一匹のドジョウを二羽で追いかけてこしたり、スチームの上の金アミ(高さ約30cm)に乗ったり、花や葉をちぎったり、ガラスをこすったり、ついたりもします。ミカンや柿やトマトに嘴をさしてえぐるのも食べると云うより遊んでいるようです。水は嘴を水に入れてすくい上げるようにして飲みますが、(1回〜11回)一晩に二度飲む事もあります。なき声はキ、キ、キーイ、キーイとだんだん音階をあげていき、終には絶叫するようにキーイッと鳴きます。始めてきた時には、どこか痛いのか苦しいのかとびっくりした位の調子です。きく人によってキーウイーときこえるのでしよう。時間はきまらず、一晩に二度なく事もあります。なかなか時もありはつきりしません。大体キーイというのが12回〜29回です。怒った時にはグワーというような声を出します。

御機嫌な時の温度は室温13℃〜20℃位のように思われます。9℃や22℃では何となく具合が悪いようです。しかし冷房となると19℃では具合が悪く、21℃〜24℃、(25℃位にあがるとこれまた御機嫌な、め)暖房の場合は15℃位。しかし暖房は冷房より若手のようにみえました。嗅覚が鋭敏な故かスモッグなどは大の苦手で、どうも様子がおかしいと思って外へ出てみるとスモッグだったりし、酸素吸入で何とか気分をなおして貰った事が三回程あります。音に対しても敏感で、今でこそハイウエイの騒音や通天閣の時計にも馴れたようですが、最初はいかような位ビクビクしていました。が、これは意外と学習能力があって、すぐに担当者の声、カギの音、ドアの音、等に馴れ、しかもそれ等の音と餌を結びつける事が出来、(巢の中でねむっているようにみえるのですが)ドジョウ

やエビヅル虫に目のなかった時は、カギの音がするともう待ちかねて巢から出て来て戸口で待っていたり、呼ぶとすぐ出て来たりしました。現金なもので、熱狂期が過ぎるとミ、ズはふんだんにあるので、他の餌ではつり出せません。大体キーウイーの食性についてはムラや個体差があるようですが、資料リストにのっていたミールオーム(養殖可能)や肉類についてもいっさいみむきもしてくれないので、最初はすっかりアテがはずれて、どうなることかと思いました。専らミ、ズ一辺倒で、1日1羽当り約400g、ドジョウやエビヅル虫ではムラがあって、続けるの主食にはなりかねます。この時、上司の周到な配慮と、園をあげての同僚の応援、市民の皆様の御協力がなかったら、とても乗り切る事は出来なかったでしょう。多くの動物園、遠方の方々からも航空便でミ、ズを送っていただきました。今更感謝の念に堪えません。誌上をかりて厚く厚く御礼申し上げます。一年たった今、パンも食べ出し、やっとミ、ズの上給自足のメドもついて来ました。特にその養殖について御指導下さった米人マイヤー氏には深く感謝してをります。みなさま、ほんとにありがとうございました。

華麗な装いの多い鳥類の中であって、キーウイーはごく地味な目立たない鳥です。その上昼は巢の中で眠っているのですから、観賞価値はゼロに等しいと云う人もいるでしょう。しかしキーウイーこそは人に知れない深海の珠のような鳥です。このPRばやはりのセチ辛い世の中にあって、底知れぬ魅力を秘めながら、ひっそりと夜の世界に七千万年以來生きつづけて来たキーウイー……………。もし、夜毎キーウイーの姿に接するのなら、人はいつか太古のムードにひきこまれ、常ならぬ心のなぐさめを得る事でしょう。よくこそこのような鳥が生き延びてくれたと私は何ものかに感謝せずにはいられません。それと同時に、この一見何の変哲もない鳥の魅力を知り、国鳥として誇っておられるニュージーランドの国の方々に深い敬愛の念を捧げるものです。何年か後には、キーウイーも今の環境に馴れ、昼、市民の皆様の前に姿をあらわして、様々な楽しい動作を見せてくれるかも知れません。そのような日の一日も早からん事を担当者として、又、キーウイーのファンの一人として心から願っています。

今までに与えてきたもの、○印は資料リストにのっていたもの。

○ミ、ズ(唯一の主食)現在1羽当り約300g、ドジョウ、エビヅル虫(非常にムラがあるが、熱狂的に好む時もある。)パン(動物質でない食物としてムラはあるが、連続的に食べるようになった)○リングのおろしたもの、柿、ミカン、トマト、ビワ、スイカ、イチゴ、○キャベツ、スリエ、(いずれも丸ごと。嘴をさしているが、栄養源とまではいかない)

全然食べなかったもの
ハクサイ、マクワウリ、ナシ、○エンドマメ、○グリーンピース(カンズメ)、○キャベツの細切、肉類(牛、馬、豚、羊、鶏、兔、肝臓、心臓)、○ミールオーム、ドックフード、○生卵、○むし玉、○レタス、○にんじんのおろしたもの、なましいたけ、コマツナ、シメジ、犬用ソーセージ、ハムカステラ、ムシイモ、川エビ、タニシ、貝のムキミ、ペレット、カマボコ、○ブドウ、○干ブドウ、ガの一種のサナギ。

大阪市天王寺動物園飼育係 磯田啓子

動物園グラフ

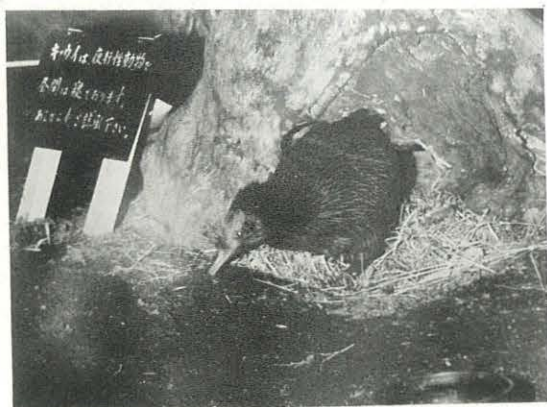
珍鳥キーウイ

“夜の生態”

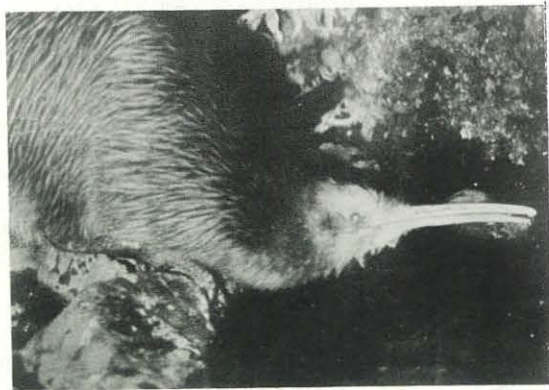
ごきげんに散歩、食事、……。意外に大きな鳴声。ミミズ好きの大食漢なのに、夜行性で昼間はかくれたまま、その上、物音に敏感。

去年7月、ニュージーランドから、つがいがおくられた。しかし、入園者にはなかなかお目見出来なかったが、その生態を深夜、赤外線をつかってフィルムにおさめた。(資料提供、大阪朝日新聞社)

午前0時00分: 穴ぐらからにゅっと顔をだし、土の中にくちばしをぐさり。小走りに部屋の中をぐるぐる歩く姿はペンギンそっくり。走るときは、カンガルーに似てビョン、ビョン。
同0時15分: 水を飲み、5分後に穴ぐらへ。
同1時30分: 再び姿をあらわす。エサ場へ直行、長いくちばしでミミズを取りだし、ドンドン飲み込む。食べ終わると、部屋の中を散歩。突然立ち上って「キーウイ」「キーウイ」と鳴いた。窓ガラスがふるえるほどの大きさだ。
同4時00分: 穴ぐらに姿を消す。



↑午前0時、幹の穴の巣から「コンバンワ」のこのこできて活動開始。



↑午前0時15分
目ざましの水をまずひと口。
のどをうるおす。



↑午前1時30分
直立の姿勢で「キーウイ、キーウイ」と21回、連続して鳴く。



↑午前2時10分
「珍味、珍味……」と、好物の
ドジョウもばくつく。

動物園ニュース

★エランドの赤ちゃん



5月31日エランド(おおかもしか)に赤ちゃんが生まれました。エランドは、アフリカのかもしかの仲間でも一番大きな種類で、かもしか園でも一きわ目立つ存在です。赤ちゃんも親に似て背中から腹にかけて数条の白い縞があり大変かわいいものです。母親といつもしょに歩いています。

★トラの人工哺育



4月15日にたった1頭生まれてから母親の乳で育てていましたが、あまり発育がよくありませんので5月18日に人工哺育にきりかえました。

エスピラックという肉食獣用の粉ミルクを与えていますが、最初はお乳を飲みこむ元気もないうらいました。しかし、だんだんとなれて、どんどん元気になり、このごろでは、兎肉の小切を食べるようになりました。また、じやれてきて足にからんだり、おいたをして噛みついたりヤンチャぶりです。捨犬の仔と時々遊んでいます。

★ライオンの赤ちゃん



5月21日ライオンに赤ちゃんが3頭生まれました。全部おすの赤ちゃんで、母親が育てています。前のお産のときは、育てないので引きとり、人工哺育したのですが、今度も心配しましたが気候もよくう

まく育てています。やはり、母親のお乳ですとまるまるしてとても元気です。まえに生まれたトラの赤ちゃんが人工哺育であるのと比較すると、よくわかります。将来は、このライオンの赤ちゃんと、トラの赤ちゃんをいしょに育ててライガーを作りたいというのが、担当の飼育係の夢です。

★フラミンゴが抱卵中です



キューバフラミンゴの交尾がちょこちょこ観察されていましたが、その後、泥を山形に積みあげた巣を3つ作りました。以前から低い泥の巣をつくっていましたが、今度は大変立派なもので、これはひょっとすると思っ

★オオヅルの産卵



ていました。しかし、次の日に1コ、続いてまた1コと破卵してしまいがかりました。しかし、1コだけは健全で、うまく抱卵を続けています。フラミンゴの抱卵日数は、30~32日ですからこの号が発行されるころにはすでに、動物園では初めてのかわいいひなが見られることでしょう

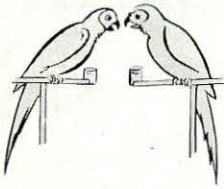
オオヅルが、今年も産卵して抱いています。このオオヅル夫婦は、過去3~4年のうちに数羽のひなをかえしているベテランです。笹ぼうきの穂で作った簡単な巣の上で、鶏卵の3倍ほどの卵を2コ抱いています。オオヅルは29~32日の抱卵期間です。今年も、きっと2羽のうすい茶色のうぶ毛のひなが見られることでしょう。

5、6月動物園日記

- 5/20 キューバフラミンゴ3羽が産卵し抱卵をはじめました。
- 21 ライオンの赤ちゃんが生まれました。トラの赤ちゃんは人工哺育中ですが、ミルクもどしたりして調子がよくありません。フラミンゴの卵は2コまで破卵してしまいました。
- 24 キリンの交尾を観察しました。ライオンの赤ちゃんは3頭ともおすで、元気に育っています。
- 25 セイランのひなが人工ふ化しました。
- 26 ニホンシカの出産シーズンに入り、次々とパンビちゃんが生まれています。
- 27 キングロハジロが6コ産卵し抱いています。
- 28 子象のひろ子ちゃんが外耳炎になり治療を受けています。
- 31 エランドの赤ちゃんが生まれました。アライグマにも赤ちゃんが2頭うまれました。
- 6/1 メンヨウの毛刈を行いました。

夏の日覆い作業がはじまりました。

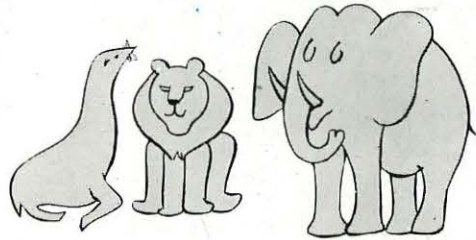
- 3 エゾシカとブラックバックの赤ちゃんが生まれました。
- 4 トラ1頭を動物交換として出園しました、かわりにワラビー2頭が入園しました。めすの袋には赤ちゃんが入っていました。
- 8 さいの運動場のモルタルの壁をサイがつきこわしましたので、応急修理をしました。
- 11 キヨンの赤ちゃんが生まれました。キングペンギンが産卵しました。大事に抱えていますので、うまくゆくと、7月末にはふ化するでしょう。
- 12 スカンクが2頭生まれました。
- 13 クロサイの乳房が大きくなってきているとの報告があり、赤ちゃんの期待をもたせています。
- 14 シロクマのおすがむし暑い梅雨に調子をくずし、食欲不振となり動作もぶくぶくなって心配させました。
- 15 アイスランドから空輸されたカモの卵30コを電気ふ卵器に入れました。



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

- ・医学実験用動物
- ・愛玩犬、猫直輸入
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・教材用鳥獣剥製販売
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券150円・鳥獣価格表100円



有限会社 吉川商会

本社 神戸市生田区中山手通三丁目二八番地
 飼育場 神戸市葺合区神仙寺通三丁目一番地

電話 (078)22-8195・22-1517

電話 (078)24-3494



オイシサも…

品質も…

グリーンとアップ!

グリコジャイアントコーン

・バニラ・ナッツ・チョコレート

30円50円

★とろりとした
良質のチョコレートに
ナッツがかかっている!



グリコ アイスクリーム

江崎 グリコ 株式会社